

第2次大戦下における ノルウェー教会の抵抗と二王国論

石 居 正 己

序

1988年第7回国際ルター学会がオスローで開かれた。主題はこの世に対する責任、ルターの意図と結果ということであった。ノルウェーは、第2次世界大戦中ナチス・ドイツの占領下にあったが、教会はその抵抗運動の精神的支柱となった。しかも指導者のベルグラフ監督は、ルターの二王国論^①をもって立った。それはバルトとその影響のもとから、ルターの二王国論が、多くのドイツの神学者たちの政治的な妥協の原因と目されたのとは、まるで反対の状況であったということが出来る^②。しかし、この学会では、『ルターの政治的勸告の利用と乱用』という題でE. W. グリッチ教授がベルグラフの問題にふれる発表をしたが、最後の時間であったこともあり、全体のプログラム上特にこの点からの突っ込みはなかった。もちろん二王国論については、特に第2次大戦後かまびすしく議論され、1960年代から1979年代にかけてルーテル世界連盟の神学部門においても検討されてきているから、ある意味では一応の結論が出たこととして受け取られているのかもしれない。しかし、ノルウェーの教会の抵抗と、それがルターの二王国論を基礎にしたことについては、わが国では案外知られていないので、それをベルグラフ監督の論文と彼の指導下でまとめられた文書を検討しつつ考えて見たい^③。

1. ノルウェーの教会

約400万のノルウェーの人口の94%がルーテル教会に属している。しかも2万ばかりの自由教会のほかはみな国教会の会員である。9世紀の終わりから、

まとまったノルウェーの形が形成され、10世紀ころまでいわゆるヴァイキングの侵略により各地でその勢力を張った。その首領格で王になったオラフ1世（10世紀）がキリスト教に改宗し、間もなく全国に及んだ。14世紀から19世紀の始めまでデンマークと統合し、その後20世紀の始めまでスウェーデン連合の中にあった。デンマークとの統合時代に宗教改革があり、いちはやく改革を受け入れて、ブーゲンハーゲンによって新しい教会の秩序を建て、それ以来ルーテル教会としての歴史を保ってきている。

教会は「教育と教会」省のもとにあって、7つの監督区に分かれている。基本的な経済は中央ないし地方の政府から支出を受ける。こうした国教会としての制度そのものは、自発的な運動や伝道と直接には馴染まないから、そのために各種の運動がおこされて来た。ことに20世紀の始めO.ハレスビー（Ole Hallesby, 1879—1961）を指導者とする人々は当時の国教会とその教職養成のオスロー大学が自由主義神学に毒されているとして、自分たちで独立神学校（Menighetsfakultet）を形成し（1908）、敬虔主義—正統主義の神学と實際を強調したのである。敬虔主義はもともと正統主義の神学があまりに論争的で、思弁的な議論に走り、実際の信仰生活に関わることが少なくなったのに対抗して起こったが、神学的論議そのものに批判的であったから自らの神学を形成しなかった。むしろ、実際の批判にもかかわらず、神学としては正統主義神学を受け継いで、保守的であった。しかし、彼らの運動は信徒の自覚と積極的な働きを促し、国教会もそれを無視することは出来なかった。事実独立神学校は、自発的な支援のもとで始められたが、現在は国の援助も受けており、国教会の牧師の80%がこの神学校の卒業である。そのような展開を見たのは、比較的新しいことであるが、精神的には早くから大きな影響をもっていたと言える。したがって、教会は国教会であるとはいえ、単に教職のもとにあるのではなく、敬虔主義の影響下で強い信徒の交わりが形成されていた。同時に自由主義神学に対する激しい批判によって、一般的に教職の責任感もまた信仰告白に対する忠誠の念も改めて意識されていたのである⁴⁾。

2. ナチス・ドイツの侵攻と教会の抵抗

1940年の4月にドイツ軍がノルウェーに侵攻したが、彼らは大した軍事的な抵抗も受けず、他方王と政府はその日のうちにオスローを逃れた。やがてこのナチス・ドイツの支配下にそれまでの政府が存続しえないことが明らかとなり、占領者は新しい親独政府を国民連合党のクイスリングの下で成立させた。それに対して、1937年以来オスローの監督として全教会の指導的位置を占めていたE. ベルグラフ (Eivind Berggrav, 1884-1959) は、教会内のあらゆる勢力を結集してこの外敵の力に当たろうとしたのである。ベルグラフ監督自身はいわゆる自由主義神学の立場にいたとはいえないが、ハレスビーからすれば自由主義陣営の領袖ということになる。そしてハレスビーは、1920年以来国教会との協力を一切断ってきた経緯がある。それにもかかわらず、ベルグラフ監督はハレスビーと結び、全キリスト教評議會を成立させた(1940年10月25日)。もちろん危急の際とはいえ、それにはベルグラフ監督の人柄と指導力が大きな意味を持っていた⁵⁾。

1941年の1月始め、国教会の7名の監督は、「教育と教会」相に書簡を送り、政府の一連の措置に対しての説明を求めた。その中には、次のように述べられている。

「われわれの信仰告白が示すように、教会は法治国家と関わるものである。その際、前提にされているのは、国家が法と正義という、神の欲したもう二つの規範を、国家の機関によって正しく保持するということである。ノルウェーの憲法は『福音ルーテル教会が国家の宗教である』と定めている。それゆえ教会にとっては、次の点について検証することが必要不可欠となる。すなわち教会的事項と関わりを持つ国家が、教会の信仰の根拠——聖書と信条——から出てくる法的・道徳的義務を自ら引き受け、それに縛られているものと考えているかどうか、ということについてである。」⁶⁾

1941年の春ベルグラフ監督が牧師たちの集まりでなした講演が『運転者が正気を失った時——不服従の義務についてのルターの態度』⁷⁾であって、それはひそかに印刷されて人々に回覧された。こうして教会とナチス・ドイツの御用政

府とは、両立しえないことが次第に明らかにされていった。そして、翌1942年監督たちは政府に対する抗議と共に、全員国教会の監督たることを辞した。もちろんそれは、教会によって召された監督また牧師の仕事を止めるということではない。その立場を明らかにした神学的宣言である『教会の基礎』⁸⁾は、復活祭に際して全教会で公けにされた。それを契機として、国教会の1000人の牧師のうち93%の者が辞任した。彼らは教会の自立性は神の二様の支配に基づき、国の権威とは異なる領域にあるものと考え、国教会における地位は捨てても、それが教会の召しと按手の意義を捨てることになるとは考えなかった。その結果こうした緊急の事態の中で、事実上民衆の教会が形成され、それはまさにこの神学的宣言の信仰告白を基礎にしたものとなった。ベルグラフ監督がその間に書いたものが、監視の目を潜って印刷され、のちに『人間と国家』という書物となった⁹⁾。ナチの御用政権の教会行政のもとには、僅かな牧師が残るだけで、よしんばその牧師が教会に来て説教しても、人々は集まらなかった。こうして大多数の国民の教会は、抵抗運動の精神的支柱となったのである。

3. 『教会の基礎』

主としてベルグラフ監督のもとで書かれたとされる『教会の基礎』という神学的宣言は、6項目よりなっている。神のことばの自由とみことばへの義務について、教会と教職按手について、及び教会の一体性についての、最初の三項目は、「われわれは告白する」という言葉で始められる。それはルーテル教会の信仰告白に基づき、自分たちの信仰的な立場を明らかにすると共に、それに基づいて具体的に当時の政府の指令が、教会にとって容認され得ないものであることを明らかにしている。神のことばを基とする宗教改革以来の伝統は、慰めの言葉を語るのみならず、勧めを含めて、誰がそれにつまずこうとも、恐れることなく語られなければならない。ノルウェーの教会は国教会の制度のもとにあり、教職は国に定められた地位を占めている。しかしもし政府との関係がうまくゆかない事態となっても、教会が召し、按手した教職こそ、教会の職務に正当に従事すべき者である。さらに教会は、按手された教職のみならず、多く

の働き人を抱え、学校、施設を通しての働きをなして来た。それらの働きは、キリスト者の家庭のあり方をも含め、教会の一体性と連帯責任の中にある。のみならず、「義のために苦しめられている者たち」の側に立つべき教会は、良心に対するあらゆる暴力的な圧迫に反対せざるをえないという。それは、教会に対し、あるいは教会内の出来事についてのみでなく、この世の不正に関わる基本的態度を示しているのである。

第4から6までの項は、教育に対する両親と教会の責任、この世の権威に対するキリスト者の態度、ノルウェーの国教会制の問題についての宣言である。子供の教育については、両親と教会は彼らが信仰的に育てられるために、責任をもってあたらなくてはならないことを明言している。従ってこの世の権威が、キリスト教적인見解とは異なる道徳的な教化を企てるなら、教会はそれを黙認することは出来ない。教会の信仰告白は、二つの秩序を区別し、それが混じり合わないようにすることが神の意思であると考えて来た。したがって、国家が霊的な支配に介入し、魂をも暴君的に支配しようとするなら、神に対する罪を犯し、それはもはや神の道具ではなくて悪魔的力にはかならない。キリスト者は正しい服従を考えているが、このような時には服従の限界に直面する。「全体主義者が良心を支配しようとし、神のことばとキリスト者の良心に基づいてすべてを判断する権利を否定しようとするなら、そのような場合には、教会は聖書と信仰告白を基として立ちあがらなくてはならない」。国教会としてのノルウェーの教会に対して、国はある程度の指導と命令の権威を行使し得る。しかし、キリストの教会は、神に関するすべてのことに主権をもっている。差し迫った状況の中で、教会とそのしもべたちは、神のことばと信仰告白に従って生き、行動しなくてはならない。皮肉なことに、当時のノルウェーはナチス・ドイツの支配下にあったが、そのドイツに端を発した福音的ルーテル教会は、これまでと同じく今日も、「ノルウェーの霊的祖国」であると、力強く宣言している。

この文書によって、また大部分の教職が国教会の組織から離脱することによって、教会は事実上政府と別な組織になり、国民の告白教会となり、抵抗の

拠点となった。もちろん、ノルウェーは、外国の軍事的な侵略のもとにあった。政権を握ったクイスリングは自国民といえ、ドイツを背景とする傀儡政権にはかならない。国王を始めそれまでの政府首脳は国外にあった。したがって、彼らは国教会のあり方にならされて来ていたとはいえ、その時の国のあり方とは一線を画して考えやすかったと言えよう。しかも、国教会といっても、単に聖職者の教会でない。敬虔主義の影響のもとにあって、強い信徒の交わりが組織されていた。そして、敬虔主義の刺激によって教職の責任感、また信仰告白に対する忠誠の気持ち改めて意識されていたことが、こうした事態を進んで受け取る勇気を持たしめたのであろう。その国教会であることも積極的な意義をもって理解された。すなわち国家も教会から独立しえないという確信が彼らを支えた。憲法によると、国はすべての子供たちにルーテル教会の信仰における教育をほどこすべき責任をもっていた。そのような法に基づく国教会としての位置付けを、積極的に生かそうとしたのである。それには、法治国家として、法の基礎の上で、国としての共通の課題を見る姿勢が基本にある。しかも、その法の背後に神の義を考え、信仰に於けるこの世の権威に対する服従の限界をも明らかにしたものである。また信仰的な伝統がまだ依然として生きていたその社会の構造も、まだキリスト教的なひとつの文化を意図していて、世俗的な分野がそれ事態の独自性をもつというような考えが浸透していなかったということも、実際上有効に働いたといえるかもしれない⁽¹⁰⁾。

「ノルウェーの教会が基本的には団結して力強く闘いぬくことが出来たのは、ベルグラフの指導力に負うところが大きかった。彼は、危機の時代に教会内一致を守るすべを心得ていたばかりか、共同の闘いのための神学的・一教会的な基礎づけにも成功した。そのため彼は一方ではエキュメニカルな世界教会運動との結びつきを利用し、他方ではドイツ・ルター主義の服従の伝統と闘う必要をも見抜いていた」⁽¹¹⁾。ベルグラフ監督は、Kirke og Kultur（教会と文化）という神学誌の編集をしていて、その関心は広い展望をもっていた。彼はまた、イギリスを始めとする多くの国のエキュメニカルな教会のリーダーたちと、ドイツの侵攻以前から、連絡をもっていて、平和のための活動をしていた⁽¹²⁾。そして

彼はその中で、ドイツの告白教会の闘いにも理解をもっており、自分たちの教会の信仰告白の運動として『教会の基礎』を考えたのである。

4. 『運転者が正気を失ったとき』

『教会の基礎』に論じられた国家との関係については、ベルグラフ監督が前年の春牧師の集まりでなした講演である『運転者が正気を失った時—不服従の義務についてのルターの態度』を併せて検討する必要がある。その表題自体が、ドイツに於ける抵抗運動に参加したため、1943年に逮捕され、1945年連合軍の勝利の直前に処刑された D. ボンヘッファーによっても、同じような例が用いられたことを思い起こさせる。ボンヘッファーはテゲルにおける囚人仲間、キリスト者として、また神学者でありながら、どうしてヒトラーに対する積極的な抵抗に与することになったのかと問われて、次のように言っていると伝えられている。すなわち、酔っぱらいが運転する車が、大変な速度で通りを走って来て、通行人たちをなぎ倒しているようなとき、牧師のなすべきことは、錯乱した者の犠牲となった人たちを埋葬することや、身内の者がそのような被害にあったため、哀しみにくれる人々に慰めの言葉を述べるよりも、まずその車のハンドルから酔っぱらった者を引き離すことが、より重要なのではないか、と言ったという⁽¹³⁾。ボンヘッファーもベルグラフも世界教会運動の仲間との連絡をもっていたから、あるいはその仲間うちで、このようなイメージで抵抗の必要が語られていたのかもしれない。いずれにしても、その考えの類似を注意する必要がある。

ベルグラフは、その文書のなかで次のように論じている。

二王国論という表現が普通に用いられるけれども、ルターの考えが、霊的とこの世の二つの領域を分けて、二王国を考えているというのは間違いで、ルターは実はただひとつの神の王国を考えているだけである。そのもとにある信仰者に二つの服従があるのではない。ルターは、神がわれわれの主であり、彼のみがあらゆる被造物の上に支配される、と言う。なるほど秩序は違い、それぞれ独自の機能を果たすけれども、創造者なる神が救済者なる神と分かれたらな

いように、いずれも神のものである。本来、愛を促進し、正義を執行すべき国は、今はもはやむかしのように限られた範囲に止まってはいない。教育、文化、精神生活のすべてにわたって支配しようとする。ルターは、この世の権威が神から与えられた人間の権利に服従するように考えた。そうでなければ、それはたちまち悪魔に利用されることになる。いかなる政府も、人の魂の内に権力をもって介入することはできない。市民的権威が魂にまで力を及ぼそうとすれば、それは自らを神にすることになる。教会と国は互いに他なしでは存在しないが、もしそれが互いに他の領域を侵そうとすれば、それはまさに悪魔的になる。ルターはそのような権威を暴君と呼んだ。暴君の権威は、狂った運転者とか、暴走する奔馬のようなものである。

これに対抗する武器はみことばと苦難である。黙っていれば、罪を容認し、それに加担することになる。「君侯が不正義である時その民は従うべき義務があるのだろうか。答えは否である。誰も法に背いて行動することは出来ないからである。法は神の意思である。あなたは神に従え。」⁽¹⁴⁾ それは1533年のゲオルグ公への批判においても明らかである⁽¹⁵⁾。ルターは先にはこの世の権威を奪いとうとすることによって、二つの秩序を混同しようとする教皇に反対したが、次にここでは逆に体、財産、この世のことがらから手をさらに伸ばし、宗教的な力を得ようとするこの世の権威に反対しなくてはならなかった。「手の職務から彼らは口の職務につこうとさえする。これらのこの世の諸侯たちは霊的王国を支配し、説教壇と教会を制約しようとする。そして公よ、あなたが聞こうと欲することを説教させようとするのである。とんでもない。それ位ならいっそ悪魔に私の場所を与えて説教させたほうがましだ」⁽¹⁶⁾。

ルターは決して二つの王国を分離し、ふたつのそれぞれ関係のない世界を構成していると考えたのではない。なるほど二つの王国はそれぞれ固有の機能をもっている。そのことを彼は強調した。しかし、それらに機能を与えてくださったお方は同じで、そのお方がそれらの目的を定めたもう。市民的な権威は神の法に従う。教会はこの世の権力ではない。しかし、それは権力に対して神の法を掲げていなくてはならないのである。

説教者は神のことばを伝えることを委ねられているのであるが、ルターが神のことばという時、律法とは分離した福音だけを考えているのではない。福音を説くというのは、喜ばしきおとずれと共に、侵すべからざる律法をも説くことを意味している。神が両方の王国を支配しておられるのだから、説教する者は両方に対して神の言葉を説かなくてはならない。神はこの世の権威を造り、海へ押し出したあとは勝手に航海するように任せられたのではない。教会の声は個人の意見ではなくて、その職務からの声である。職務は神のことばの職務である。王たちや支配者たちに真理を語る神のことばのしもべは、「市民的権威の事柄に介入するのではなく、いとたかき権威に仕え、それに服しているのである」¹⁷⁾。

もちろん、ルターは教会やキリスト者が暴力を用いるべきでないと考えた。しかし、教会が無抵抗のさだめに従っているだけであれば、暴徒たちが好き勝手に振る舞うかもしれない。そのような時には、キリスト者である市民は、ほかの者たちと異なる存在ではない。キリストの名において、あるいは教会の名においてこれに立ち向かうのではない。ここでは、彼も十戒の第二の板の下にいる。神の子としているのでなく、市民的権威の下に服従している。そうであれば「律法の名において」行動しなくてはならない。律法に責任を負うのである。それがルターがシュマルカルデン同盟の時にとった態度である。道で殺人犯に出会った時、何も道徳的な義務を考える必要がないように、諸侯は（市民も）皇帝が暴力手段に訴えることが明らかな時、服従の義務から解かれる。ただし、そのような状態で取られる武器は律法の名に於いて用いられなくてはならない。

ルターは権威に対して非常な敬意をはらっている。しかし、またすべての地上の権威に対して、——後の時代にルターのせいにされていることは対照的に——神に与えられた自由をもっていた。彼にとって、教皇は宗教的な反キリストであった。暴君は政治における反キリストである。キリスト者の義務は、いずれに対しても、キリストのしるしを掲げることにある。こうしてベルグラフは、ルターに基づきつつ、信仰者が不服従の義務を説いていることを主張し

たのである。

5. 神学的な問題

これらの文書は、多くの神学的な課題を含んでいる。ことにルターの考えを基礎に据えているので、その受取り方を確かめ、また検討しなくてはならないことも多いのであるが、ここではそのうちの2、3の点に限って検討してみたい。

(1) いわゆる二王国論

『教会の基礎』の中には、「われわれの教会の告白は、二つの秩序ないし支配をはっきりと区別している」(第5項)と言われている。それはいわゆる二王国論であるが、二王国論がルーテル教会の教理であるかということになると、問題がないわけではない⁽¹⁸⁾。そのことに直接触れているのは、アウグスブルグ信仰告白の16条のみである。そこでは、「この世に於けるすべての権威と定められている支配と律法とは、神によってつくられ、設定されたよい秩序である」⁽¹⁹⁾とされ、信仰者はこの世の働きにも、罪を犯すことなく参与することが出来ることを示している。しかし、それは主な改革者たちが共通にもっていた考えかたであり、また同信仰告白の弁証論は、この箇条を「論敵たちはなんらの除外なしに受け入れている」⁽²⁰⁾としているのであるから、当時のローマ教会も異論を差し挟んではないことになる。

アウグスブルグ信仰告白が主張しているのは、主としてキリスト者もこの世の生活に参与し得るということにはかならない。これはもちろん直接にはメロンヒトンの筆になる。ルターは、それぞれいろいろな角度から論じているが、正面からこの世の問題を扱ったのは、まず「この世の権威について」(1523)である。そしてそれは「人はどの程度までこれに対して服従の義務があるか」という問題意識で述べられている⁽²¹⁾。ザクセン選挙侯領の教会の巡察において、この世の権威の任にある者に、緊急の場合には監督の仕事をするを委ねたとはいえ、ベルグラフ監督が示しているように、シュマルカルデン同盟の諸侯

が皇帝に対抗する権利や、ゲオルグ公領の問題に対してルターは抵抗を認めている。1539年の皇帝に対する抵抗権についての討論の提題において彼はその考えを整理して述べている⁽²²⁾。この提題のなかで、ルターはまずこの世の権威に従わなければならないと言う。十戒の第一の板のゆえに悪を行うこの世の権威に対してさえも、抵抗すべきでない。なぜならその悪を妨げ、その権威に抵抗させるようなもう一つの権威を持っていないからで、神によって立てられた権威や国家を人の無思慮で破壊してはならない。むしろ神の怒りにまかせて、自分では報復しないがよいという考えを依然として保っている。しかし、教皇は本当に権威であるのかという基本的な問いを彼は提出する。福音に反すること、神の秩序を混同することに於いて、もはや彼はダニエルの言う怪物になっていると決めつける。問題は、このようなルターの議論の前半のみを受け止めて、この世の権威を抵抗すべきでないものとするか、その後半を主体にして、もはや権威でないものとして判定し得るかにある。

神が二様の仕方での世を支配されるということは、広く認められて来た考え方であっても、その両者の関係について明確な形で定まった二王国論の教理を、ルターやルーテル教会の教理の中に見つけるのは難しい。むしろそれぞれのルターの議論を、それがどのような脈絡で述べられているのかを見てゆかなくてはならない。ルターの考えの全体像を適切に注意しないで、自分勝手な考えを支持するように、ルターの政治的な発言を引用してはならない。実際いわゆる二王国論はU. ドゥフロウらが編纂した書物の題が示しているように、多義的に理解されて来た⁽²³⁾。現実の問題を批判するためにも、弁護するためにも用いられた。それは神の支配の仕方の考えであって、ただちにこの世の教会と国家という組織の関係と同一視されてはならない。またその枠組みと共に、何を軸として取り上げられなくてはならないかを考える必要がある。少なくとも信仰の問題を個人的な領域に限定し、この世の事柄では別の学問的な原則に従うようにすべきだとしたのは、むしろ19世紀以来の啓蒙主義の考えであるといつてよいし、またその上で信条主義的で多く国教会としてあったルーテル教会は、実際上国の権威を基本問題としてしまおうとした⁽²⁴⁾。

ベルグラフ監督自身はもともと宗教心理学者であって、特にルターの研究者ではなかった。彼はルターに関しては、その小教理問答の解説を、単にルターの元の言葉だけで満足せず、さまざまなルターの著作からの抜粋を当てて、新しい問答を公にしたというだけであった。従ってこの考えを構築するために、彼のもとで若い学者たちが助けた。そのことが、かえってルターを全体的な展望のもとで見ることが出来るようにしたのかもしれない。そしてルターの闘いに自分たちの闘いの例を見たのである。

事実大戦前のノルウェーでは、いわゆるルターの二王国論をだれも検討はしていないという。ノルウェーにおいてばかりでなく、ルターの考えを二王国論という形で整理して見るようになったのは、古いことではないのである。1928年のハレスビーの倫理学にもこの教理についての言及はない。しかし、1940年戦争に巻き込まれる前後に、神の二様の統治の説が紹介された。それは Leiv Aalen の比較的長い紹介で、その中には Harald Diem, Herbert Olsson, Gustaf Törnvall の論文が検討されていた。ディームと共に、Aalen はこの世の領域に於いて支配者にも被支配者にも同様に適用される神の律法をのべつたえることを、教会の使命として強調した。彼はノルウェーの教会の抵抗の過程に直接関与しなかったが、重要な前提を提供した。ベルグラフ監督はふたりの神学者にルターの引用をさせたと言われているが、当然こうしたことが前提になっていたに違いない⁽²⁵⁾。

それは、決して国教会の立場を国と直結させて考えているのではない。この世と社会に対して、教会は第一に人の良心に訴える。この力はキリスト教信仰と切り離せない。しかし、彼は教会を政治的あるいは世俗の社会の良心として考えるのはよくないと言う。教会はただそのような良心に訴えるだけである⁽²⁶⁾。これは、たとえば G. アウレンの考えと少し違う。アウレンは、この世の権力が正義のしもべではなくて主人になろうとする時、教会は神の意思に反しないように国家の良心として働かなくてはならないと主張している⁽²⁷⁾。もちろんアウレンもベルグラフと同様な事態を考えており、教会と国家の間に働く律法を重視した。しかし、同じように国教会の立場をもつ所であるが、スウェー

デンのアウレンが教会は国家の良心として働かなくてはならないというのに対して、ベルグラフはそうでさえない。教会は国家の良心に訴えると言うのである。ベルグラフ監督はより明らかな形で、ふたつの異なる仕方の、しかも関わりあう神の支配の働きの中で、教会と国家を見ているといえよう。そしてそれは教会が強い立場をもっていない世俗的な国家の中でも、よりよく適用できる主張なのではないだろうか。

(2) 律法の問題

ルターは、信仰、不信仰にかかわらずすべての人を神の秩序のもとに置くいわゆる市民的用法と、人の罪を知らせ福音に導く神学的用法という律法の二つの用法を考えた⁽²⁸⁾。和協信条は、それに加えて教育的な第三用法について述べている⁽²⁹⁾。ことにその第三用法については、それがルター的であるのかどうかで議論されて来た。しかし、その第一用法に力点を置いたボンヘッフナーは、極めて重要な指摘を加えた⁽³⁰⁾。すなわち「ひとつの律法」の違った用法が問題なのであり、またそれをそれぞれの機能によってもちいるのは、人や説教者ではなく、神ご自身であることを示したのである。教育的な用法がキリスト者にもどのように働くかは問題であるとしても、市民的用法と教育的用法という仕方では示されているのは、それを神の律法であることを知るか、知らないかは別として、すべての者が共通に神の律法のもとにあるということにはかならない。しかも、実定法を直ちに神の法と考えるのではなくて、神の義を基としてつねに検討されなくてはならないのである。

その市民的用法において、律法は「罰のおどしと恐怖によって」人々を罪に対して抑制する。それは、信仰者でなくても、ある程度知り得る神の定めと考えられた。したがって通常いわゆる自然法と同一視されたのである。ルターもまた自然法という用語をしばしば用いている。しかし、自然法という概念は理性によって推論されるものを考えていて、一般的で、独自の歴史をもっている。むしろルターが意味しているのは、神学的で、神の律法を意味し、それは創造の法、あるいは創造者の法とよばれるのがより適當ということが出来よう⁽³¹⁾。

ベルグラフ監督も、自然法と創造者の律法とを厳密に区別はしているわけではない。実定法の基礎に考えられる自然法は、神学的に見れば神の律法に置き換えられるべきで、その神の法から神学は考えるし、また義の観念として人間に共通の場を提供することが前提と考えられているといっていよい。正しい政府は、その市民の法的な基礎と法律とを守らなくてはならない。彼はパウロが言っているように、律法は市民と支配の権威との間に挿入されたものであるとする。それは人間としての共通の関わりの中核として考えられる。「通常自然法に対して向けられる非難は、それがつねに『一般原則』というもやもやしたもののうちに見いだされ、決断すべき時に的確な手引を与え得ないということにある。しかし、同じことがすべての原則について言えるし、実際福音やキリストのみことばについてさえ言えるのである。キリストは決して決疑論の集大成を与えようとはなさらなかった。彼は水夫にコンパスを与えられるのであって、海図を与えられるのではない。われわれは、その原則の価値に添うように自ら決めることが求められている。あらゆることが、その適用の方法にかかっている。しかし、その異なる状況への適用が教会の責任となることはただ稀に起こるだけである」⁽³²⁾。

教会が緊急な社会的、政治的な問題に対して、ことに著しい不正が生じているようなとき、率直に語るべき責任をもつような状況が生じるであろう。そのような場合に絶対的に肝要なことは、信仰者とそうでない者、教会と社会の間にある種の共通の基盤があるべきだということである。この点で自然法の問題が重要視されるのである⁽³³⁾。

もし国が律法の権威を守ろうとするなら、あらゆる市民はそれに従う義務がある。律法によらないでは、正当な権威はないし、服従の義務もない。国の法がただちに神の法であるのではなくて、それが神の法に照らして妥当か、またその執行者が神の義に添うことを目指しているかが問われるのである。国が律法によらないで全く恣意的に支配しようとするならば、たちまち不正に陥る。それは往々それ自体を目的として、絶対化しようとする警察国家になってしまう。こうした不正な国に対しては、キリスト者は不服従の権利ばかりでなく、

不服従の義務を負う。法と秩序が乱されているという判断のもとに、このノルウェーの監督は反抗の基本的な権利を躊躇せずに述べているのである。「この点では彼は伝統的なルーテル教会の態度に疑問を附し、改革派のモデルによったのである」⁽³⁴⁾ とアウスタッドは述べているが、ベルグラフ監督がその点では必ずしも神学的な厳密さをもって述べているわけではないこと、また先に指摘したように、ルターの後半に於ける主張を基盤にしていることを考え合わせる必要があるであろう。

神の言葉は信仰者と不信仰者を含めすべての人間に共通なひとつの要素があることを語る。それが神によって人の心に記された「律法」であると考えられている。もしわれわれがキリスト教信仰をいいあらわす時、われわれが語ることが他宗教のあるいは無宗教の人に訴えることが出来るのはまさに、そのような共通項を持っているからであり、それだからといって、われわれが福音の外にいないのではない⁽³⁵⁾。

(3) 民族の問題

ノルウェーにおいては、ナチスは外国の侵略軍として現れた。しかし、一般的にいて、問題が自分たちの国の内部に次第に頭をもたげてくるような形で出てきたら、それに正しく対応するのはなかなか困難となるかもしれない。ドイツにおいては、その前のワイマル時代に対する批判と新しい方向が待たれていたところに、それに応じるようなナチスの台頭を見た。1937年のオックスフォードに於ける生活と実践の世界会議は『教会、共同体と国家』を主題としたが、それは教会でも国家でもないがそれらの機能をもつように考えられる世俗的な共同体の中で、如何に教会が生き延び得るかを問うたのである。そして、ドイツの神学者たちの中では、当時の状況を反映して、強く民族の問題が取り上げられた。ドイツから、2、3の自由教会からの出席者を除いて、ナチス政権の干渉によって誰も出席できなかったこの会議の表題は、英語では“Church, Community and State”であった。そのドイツ語訳では“Kirche, Volk und Staat”である。CommunityとVolkとが同義かという翻訳上の問題以

前に、人々の文化、歴史における受け取り方の相違を考えさせられる。

この会議のために、ドイツで出された“Kirche, Volk und Staat”という論文集に於いて、P.アルトハウスは民族的な意義を強調している⁽³⁶⁾。彼はもともと中庸を旨とする姿勢を貫き、しかもそれが自分の神学的な立場に合致することを目指しているが、このことは当時の雰囲気を反映し、民族的な傾きを示していたと言えよう。彼は、「神が私を造られた」というルターの教理問答における創造の神の信仰を、拡大して民族をも含めて考えた。自分の民族は、自分の内的、外的な運命でさえある。民族は神の創造によるものとして、聖なるものでさえあると考えられた。もちろん生物学的な人種が歴史的な民族そのものではない。しかし「特別な意味で人種の単位とその保存が民族の形成と維持に基本的な条件なのである」⁽³⁷⁾と述べている。当時のドイツに於いては、血統と人種の問題が決定的に重要な問題となって来ていたことを考えなくてはならない。

たとえば、同じ書物に寄せているH-D.ヴェントラントの論文では、民族は国家に対して積極的な批判あるいはそれ以前の力として考えられている⁽³⁸⁾。いわば市民社会の構成の仕方とせず、社会学的な見方を展開しているのである。他方アルトハウスは国家がひとつの民族と結びつき、民族の生活への奉仕者であるとする。そして、自由主義国家において個々人をばらばらにしてしまうことに対する防御として、ある場合には全体主義も必要と考えている。ただし、全体主義がそれ自体を目的とし、絶対化する危険をはらんでいることを認めている。ただそれが民族の意志に仕えようとする限り、人々の意識を全体に向けて呼び出す役を果たすとするのである。教会は国家に対して監督するような権利を何ももってはいない。教会は各個人にまた政治家に対して神の裁きを示すけれども、神の審判を司るわけではない。逆に国家は教会を国家の機能のひとつとして整えるような権利はもっていない。教会と国家は互いに区別されたものであると同時に相互に結びついてもいる。しかし、その関係の仕方については、ルーテル教会の信仰告白は一般的、理想的な形を示しているわけではない。むしろそれは、特定の歴史的状況によって考えなくてはならないとする。

このようなアルトハウスの考えは、基本的にはひどく間違っているといえな

いかかもしれないが、彼が民族重視に傾き、民族と国を結び付け、また神の創造を、ある場合には実際の状況に比較的近く、またある場合には罪の現実と同一視して考えていることにより、結果的には現実の容認、弁護に近くなる。また教会と国家の機能の区別は、ある意味では国家の介入に対する批判でもあるが、実際にはむしろ国の施策に対する肯定的な調子が伺える。殊に教会が法を宣べることが、世の問題に直接的に関わるものというような考えは示されていない。民族も決して固定的なものではないし、ことに国という政治的な集団の単位とは別の意味で捉えられなくてはならない。その意味では、ヴェントラントの見方は、大変あざやかな印象を与えるのである。そしてベルグラフ監督の場合は、当面の相手が外から侵入した権威であったのだから、その区別が容易になされたと言えるし、事実民族という概念が強い作用をしてはいないのである。

結 語

1939年カール・バルトは、「ドイツ人は、最大のキリスト者であるドイツ人の遺産に苦しめられている。すなわち律法と福音の関係、またこの世と霊的な秩序や力の関係についてのマルティン・ルターの誤りによって苦しんでいる。それによって、この世の自然的な異教がイデオロギーに変容し、認められ、強められさえしても、あまり制約されず、制限されてこなかったのである。」「ある程度、ルター派はドイツ的異教に息つく場所を与えた。そして、その福音から創造と律法を分離することによって、何か聖なる領域のようにしてしまった。ドイツ的異教が、国家の権威についてのルター派的教理を、ナチスをキリスト教的に正当化するために用いることが出来る。またドイツ的キリスト者が、同じ教理によってナチスを承認するように導かれているように感じることも出来る」⁽³⁹⁾ などと書いている。このような線に従って、ルターの二王国論がいかにも責任があるように、多くの者が受け取るに至った。

たしかに、ルターの教理を楯にする向きがなかったわけではない。もちろん二王国論という形で問題を見るようになったのは、決して古いことではない。

しかし、その言い方がなくても、その実体があったのではないかということは当然考えられる。そこでも、K. H. ハーツが指摘しているように、19世紀の神学的、また思想的な背景が影響していることを見てゆかなくてはならない。しかし、ノルウェーの人々の二王国論理解を助けた H. ディームや G. テェルンヴァルのような人達がおり、またベルグラフ監督がまさにルターの二王国論を基礎にして、抵抗運動を支えたことが記憶されなくてはならない⁽⁴⁰⁾。少なくともその考え自体を犯人扱いは出来ない。それは、ふたつの領域をそれぞれ自立したものとして分離するのではなく、神がこの世を支配されるために用いられる二つの様式を考えている。人はそれぞれ同時にその二つの支配の様式の中にある。この関係を軸にして問題は見られなくてはならない。むしろそれはルターの神学の基本的な方向を示している。そして、もちろんこの神の支配の様式が、直ちに教会や国家という具体的な機構と同一視されることは出来ない。

けれども、このように違った受取り方がなされたのは、もちろんルターの教えがはっきりと定まった形をとっていないこと、その時々の問題に応じて述べられていることにもよっている。同時に、受け取る側での態度が問われなくてはならない。H. リチャード・ニーバーは「キリストと文化の問題に対するルターの解答は、ひとりのダイナミックな弁証法的思想家の解答である。この解答は、ルターの後継者と自称する多くの人々によって再現されたが、それは静的、非弁証法的であった」⁽⁴¹⁾と述べている。ルターの神学の基本的性格に従い、また彼の全体像を見通して、その議論を見てゆかなければ、それを本来の姿とは全く違った脈絡で解することになる。ルターの意図は決して定まった教理を形成、定式化し、受け取らせることではなかったのである。

ノルウェーの教会は細かな神学議論に巻き込まれていなかったことが、ある意味では却って幸いしたといえるかもしれない。同時に実際的な自分たちへの外からの攻撃として、ナチズムがやって来たことに助けられて、問題をはっきり見ることが出来たという面がある。またそれを助けた力のひとつに、エキュメニカルな交わりと国際的な展望をあげることができよう。それは、信仰的に

も文化的にも、自らの立場を他と比較し、相対化して見てその中で自らの主張の意義付けをして行くことを努めなくてはならないことを示している。

たしかに、ノルウェーにおいてはルーテル教会は国教としての位置をもっていた。しかし、律法を媒介にして、彼らはひろい連帯を形成し、抵抗の基礎をつくったのである。それはまた神の律法のもとでの社会のあり方を、社会学的に検討することへも開いていると言えよう。このような態度は、少数のキリスト者しかいないわが国でも、考えてゆかなくてはならない点となろう。また民族的なあり方をどう見るかは、われわれにとっても、決して無縁な問題ではない。実際には多くの民族、文化が取り込まれてきたのに、単一民族国家と称され、しかもその結合の中心に宗教的な力が据えられてきたわが国の場合、むしろ最も重要な課題として、われわれの上に投げ掛けられているのである。

(付)

「教会の基礎」

次に彼らの神学的な宣言となった『教会の基礎』を示しておく⁽⁴²⁾。

教会の基礎 — 信仰告白また宣言

(1) 神のことばの自由とわれわれのみことばへの義務について

われわれは、次のように告白する。聖書はキリスト教の教えと生活の唯一の基礎であり、基準である。また福音的、ルター的な告白が信仰の問題についての真実な正しい指針である。

それゆえに、われわれは勧めと慰めのための神のことばを、省略することなく、また恐れず、たとえそれが誰を贖かせようとも、生命と救いのための神の勧めをすべての人類に宣べ伝えることは、われわれの最高の義務であると宣言する。この意味でわれわれは神の戒めのもとに立っているのである。

教会のしもべは、それゆえ、神のことばを特定の状況において如何に宣べつたえるかという指示を、教会の外から受けることは出来ない。福音の自由な宣教は、すべての民の生活に於ける神の塩であるべきである。

またこの世の権力や権威は、それがいかなるものであっても、キリスト教的な働きを遂行し、あるいは説教者としての奉仕をなす上に、非教會的な条件を課することは出来ない。そのようなことをすれば、神のことばの自由な命の神髄を断つことになる。1942年2月10日の教會省の指令が、『国民連合党と新しい命令を認めるなら、教會と施設はキリスト教的な働きをなす上に、党の側からいかなる障害を課せられることもないであろう』といい、また1941年12月1日の省大臣の公示に、牧師の政治的、この世的問題に対する態度が、福音的なノルウェーの教會に於ける身分を得るのに決定的に重要であるとしているのを見るがよい。

われわれは神のことばの自由とそのみことばに対するわれわれの務めに固執することを告白する。

(2) 教會の教職按手について

われわれは、次のように告白する。

教會は信じる人々の集まりであって、そこで福音が正しく宣べ伝えられ、サクラメントが正しく執行される場所である（アウグスブルク信仰告白第7条）。われらの主また救い主ご自身が、その教會をつくられたのであって、それは決して地上的な権力の機関ではあり得ない。教會はキリストをその主として保つ。キリスト者の会衆は、自由に神の家に集まることが出来るはずであって、誰もそれを正当に阻止することは出来ない。

聖書と信仰告白に基づき、われわれはキリストご自身がその教會に特別な召しによって仕える者たち、すなわち伝道者、教師、牧師を設定されたと主張する。使徒的な伝統によって、教會はこれらのしもべたちを、その務めのために任用すべき命令を受けている。（エペソ4：11、第1コリント12：23、使徒行伝13：2）

教職按手は900年にわたって、われらノルウェーの教會で聖書的に正しいと認められ、任命を整えて来た。それは教會において仕えるために正当な召しを受けるための、自立した、他から影響されない連結環である。この靈的な権威

ある行為は、彼ら自身教会から召しを受けた監督たちによってなされる。教職按手とその権威ある行為、聖なる儀式は、礼拝において祈りと手をおくことによって行われる。その性格上、教職按手は本来その人の能力と力をもって、教会における神の働きを行うための、生涯にわたる召しである。聖なる奉仕の義務への召しは、もちろん個人的な失敗、不忠実、あるいは罪によって取り消されることがある。しかし、そのような最後の判定は聖霊と正義の法によってなされるべきであり、そのみが、各個人を不正から、教会を価値のないしもべから守るのである。

したがって、支配者が政治的またこの世的な関心から、按手を受けた者をその国の定めた職務からというだけでなく、みことばとサクラメントによる奉仕の任務を剝奪し、また本来教会のものである教職の服装を着る権利を剝奪しようとすることを、教会は認めることが出来ない。もし按手の権利と義務が教会の者から勝手に取り去られるなら、それは教会にとって聖壇に対する攻撃として受け取られる。

われわれは教会の岩であるイエス・キリストに、またすべての外的な考えに対して、聖書的な按手の独立と権威に固着することを告白する。それぞれの牧師は自分の按手の誓いに忠実でなくてはならないし、またその事において人に従うのではなく、神に従うべきである。

(3) 教会の聖なる一体性について

われわれは、次のことを告白する。聖書の中でキリストのからだと呼ばれている教会において、奉仕のいろいろな形と働きの枝がある。コリント人への手紙の中に『もしひとつの枝が苦しめば、彼ら全体が共に苦しむ』（第1コリント12）と言われている。これは、いつでも生活と苦悩におけるキリスト者の一体性があることを表しているのである。

ノルウェーの教会の組織には、単にみことばの奉仕者のみでなく、——信徒であれ、神学的な訓練を受けた者であれ——神のみ旨にしたがって働くように召されたすべての者が属している。もしこの世の権威が、キリスト教の学校、

家庭、自発的な活動、あるいは社会福祉の活動の基盤を破壊しようとして介入するなら、これは同時に全教会とその機関を攻撃することにほかならない。

もし、誰かが、法律に訴えることも出来ないで、自分の確信のゆえに迫害されまた責められるなら、教会は良心を守るものとなり、迫害されている者と連帯すべきである。われわれは、教会の祈りの中で『義のゆえに苦しめられている者たちの力となりますように』と祈っている。

まことの福音的教会は、それゆえ、良心に対するあらゆる暴力的な圧迫に対して反対しなければならない。その組織のある部分やその奉仕者が、その仲間も検討した末に抱えている確信によって、思いがけなくも苦しめられている時、われわれは無関心ではあり得ない。もしそのようなことがあれば、キリストのからだは傷つけられ、聖なる連帯は侵されるのである。

われわれは、教会のすべての機関の交わりとイエス・キリストとの交わりを告白する。

(4) 子供の教育における両親と教会の権利と義務について

われわれは宣言する。

キリスト者の父また母はそれぞれの子供たちを、教会の信仰において、キリスト教的生活へと育てる義務と権利をもっている。

神のことばは、『あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない。きょう、わたしがあなたに命じるこれらのことばをあなたの心に留め、努めてこれをあなたの子らに繰り返さなければならない』（申命記 6：5）と言う。また聖書は子供たちに対して『子たる者よ。あなたの両親に従え。これは正しいことである』（エペソ 6：1）と言っている。

この聖書的な根拠のもとで、ノルウェー憲法の第2条は、『福音的、ルター派の教会は国家の公式の宗教である。これに属することを告白する国民は、彼らの子供たちをも同様に育てる義務を負う』としている。

洗礼に際して、教会は両親がこの義務に従うことを表明する『然り』という

言葉を受け入れた。また洗礼の時に牧師は子供の頭に手をおいて『あなたを彼の子とし、信仰者の交わりに受け入れてくださったのは、われらの主イエス・キリストの父なる全能の神である』と述べるのである。それゆえ、子供たちをキリスト教的に育てるのは、キリスト教の学校と家庭と共に、全教会の仕事である。

この世の権威がキリスト教的な見解から離れて、人々と子供たちに対する道徳的な教化を組織だてようとするのを、教会が黙ってゆるすなら、教会はキリスト教教育に対する責任の義務を負うことに失敗したことになる。両親と教師は自分たちの良心に反して、子供たちを、『彼らの精神を革命化し』、キリスト教とは無関係の『新しい生活観』を教え込もうとする人々に委ねるように、強制されてはならない。

(5) キリスト者たちと教会の、権威に対する正しい関係について

われわれは宣言する。

われわれの教会の告白は、二つの秩序ないし支配 (ordninger eller regimenter) をはっきりと区別している。すなわちこの世の国家と霊的な教会とである。これらふたつの支配が互いに混じり合わないようにすることが神の意志である。両方とも、それぞれがその仕方ですべての神と人々に仕えるべきである。

これらは、それぞれ神からの明らかな召しをもっている。

教会の召しは、永遠の祝福をわかつことであり、神のこぼる光があらゆる状況のもとにある人間に宣べ伝えられるようにすることである。

国家の召しについてわれわれが告白することは、国家が魂の問題に関わることなく、『人々と物的資産を、明らかな不正から守り、市民的な正義と平和を維持するために守ることである』(アウグスブルク信仰告白23条)。

それゆえわれわれは、次のように告白する。もしひとつの支配が他の支配に対して主権を主張しようとするならば、それは生活のうちにあるすべてのつくられた秩序の上に主であり、権威をもちたもう神に対する罪である。教会は、この世的な事柄において、国家を支配する何の権威も持っていない。それは、

神の定めを侵すことになる。同じように、もし国家が魂を暴君的に支配しようとしはじめ、人々が信じ、意味し、感じるという本来良心の仕事であることを、決定しようとするなら、それは神に対する罪である。というのは、もし国家が良心に関わる問題において、魂を強制し、束縛しようとするなら、その結果は良心の剝奪、不正、迫害以外の何ものでもない。そうすれば、神のことばによる裁きがこれに当てはまる。国家の力が正義の道から離れてしまうなら、もはや国家は神の道具ではなく、悪魔的力となってしまう（ルカ4：6，ヨハネ14：30，黙示12-13）。すべてこれらのことから、キリスト者が示されなくてはならない正しい服従がでてくるのであるが、同時にその服従の限界をも示されるのである。

正しい権威は、神の恵であり賜物である。そしてわれわれは使徒たちと共に、良心のために、すべてこの世のことにおいては権威に従う義務を負うことを宣言する。しかし、この良心のためにという言葉は、それが神のために権威に従うということ、したがってわれわれは人に従うよりは神に従わなくてはならないことを意味する。使徒はいかに正しい権威が知られうるかを述べている。正しい権威は、よい行いをする者にとっては脅威ではなく、ただ悪しき行いをなす者にとって恐れ of の道具となるのである（ロマ13：3）。

もし人が神の道に従っているのに、権威がその魂の恐れ of の道具となるならば、それはもはや神の意志に従った権威ではない。そのような権威が真理の言葉を聞くようにさせることが、教会が神と人ともに尽くすべき義務である。聖書が『人よ、わたしはあなたを見張る者とした。……あなたはわたしから言葉を受けて、彼らへのわたしの警告を選びなさい』（エゼキエル3：17）と言っている通りである。

さらに次のルターの言葉が教会にあてはまる。『この世の権威は、良心に対して主となってはならない』『この世の権威が霊的な支配に介入し、神のみがそこに座し、支配されるべき良心を自分のとりこにしようとするなら、人はそれに従うべきでない』（WA 12. 334）。

全体主義者が良心を支配しようとし、神のことばとキリスト者の良心に基づ

いてすべてを判断する権利を否定しようとするなら、そのような場合には、教会は聖書と信仰告白を基として立ちあがらなくてはならない。それゆえ、この世の権力が『個々の市民に対して最高最大の権利』を保有すべきである（1942年2月17日付教会省布告）と主張し、良心がこの世の権威に対する服従の義務を判断する場を持たせられないような時には、教会にとってそれは神の戒めに反することである。

われわれは、すべてこの世のことについて聖書がもとめていることに服従することを告白する。

(6) 国教会について

ノルウェーの憲法規則によれば、国家の機関は教会の問題についていくらかの指導と命令の権威をもっている。これは国家が、自らの国家としてのまた政治的な考慮に基づいて、教会を外的な力をもって支配すべきであるということではない。ただ国家が教会の根拠に奉仕し、キリスト教信仰を守ろうと欲するとされていることによってのみ、国教会の秩序が出来たのである。そのような理由によって、上記の国家機関は、憲法に従い、聖書と信仰告白に従うべきなのである。従って教会は、教会の管理をなすべき人物が公に『この世の事柄は運命や宿命によって導かれているということはまことに真実である』（クイスリング首相の新年の演説）などと言うのを聞く時、深い憂慮を抱かざるを得ないのである。国家機関が福音の正しい説教と教会の建設のために最善を尽くすときにのみ、合法的な支配者が、教会の管理において指導的な権威としてのその分を果たすことが出来るのである。

しかし、たとえわれわれの教会がこのような仕方与国家と結びついているとしても、イエス・キリストの教会として、同様に神に関するすべての事柄について主権をもちまた霊的に自由である。国家は決して教会たりえない。その教会の管理に於いて、教会の機関と協力し、信仰告白の教会としての性格に忠実でなくてはならない。

このことはまた経済的なことにおいても真実である。この世的な条件の下

で、この世的な資力はみことばの宣教と教会の建設を進めるために用いられなくてはならない。教会の財産や資産は国家に属するのではない。それは人々の中で常に働いているキリスト教会に属する。教会の資力や財産は福音と教会の関心事に用いられるべきであって、その他の何物のためでもない。国家の機関はこれらの資産の大きな部分の管理者である。しかし、管理者に対して、彼が忠実であるかどうか問われるのである。

われわれは、神のことばと信仰告白に従って、教会の世話をし、守るという形の統治と協力すると共に、霊的な自由のうちにあるイエス・キリストの教会を保持する。

要約すれば、

1940年9月25日以後ことに1942年2月1日以後ノルウェーに起こったことは、それはそれぞれの出来事に於いてまた文書に於いて明らかであるが、われわれがこの教会の基礎についての告白を提出せざるを得ないようにした。

上記の状況が残りまたさらに違反するような事が広まる限り、教会とそのしもべたちは、神のことばと彼らの信仰告白への義務に従って生きて行動しなければならない。そしてその結果起こるであろうすべてを負わざるをえない。

福音的ルーテル教会は、われわれ以前の世代に於いてと同様、今日ノルウェーにおける霊的な祖国である。

注

- (1) ルターの二王国論は、王国という表現ではなくて神の支配ないし統治の二様式ということが適当と思われるが、ここではその表現を厳密に区別することをしなかった。支配という表現をとる意味については、特に G. Törnvall, *Geistliches und weltliches Regiment bei Luther*, Chr. Kaiser München, 1947 参照。
- (2) K. バルトの批判については(39)参照。
- (3) 邦語の文献としては、宮田光雄「北欧の教会闘争 — 第二次大戦下ノルウェーの場合 —」法学51巻2号、1987年6月1-35頁がある。また

Torleiv Austad の論文 ‘The Doctrine of God’s Twofold Governance in the Norwegian Church Struggle from 1940.’ が³, Ulrich Duchrow ed., *Lutheran Churches- Salt or Mirror of Society?* Lutheran World Federation, 1977 に, Hermann Günther, *Der norwegische Kirchenkampf während der deutschen Besatzung 1940-1945* が Evangelische Theologie, Jahrgang 17, Heft 7, 1957 にある。その他 Reidar Astås, *Kirke i Vekst og Virke*, Gyldendal Norsk Forlag, Oslo, 1984. Per Vosko ed., *Eivind Berggrav, Brobygger og kirkeleder 1884-1984*, Gyldendal Norsk Forlag, Oslo 1984, 等参照。なお1988年4月のルター研究所の研究会における T. ヨルゲンセン氏の発表は, 全般的に参考にした。

- (4) Cf. Theodore Backmann, Lutheran Church in the World, *Lutheran World*, vol. 24 Nos. 2 & 3, 1977.
- (5) 前掲 Austad, また宮田論文参照。
- (6) 宮田光雄, 前掲, 8頁。
- (7) E. Berggrav, tr. by G. Aus, *Man and State*. Muhlenberg Press, Philadelphia, 1951. pp. 300-319. その独訳は A. Kaufmann u. L. Backmann, Hrsg., *Widerstandrecht*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1972, S. 135-151, に, *Der Staat und der Mensch*, Classen Verlag, Hamburg, 1946 より再録してある。
- (8) Kirkens Grunn. 後出参照。H. Gunther, op. cit., 318-323.
- (9) ‘Staten og mennesket.’ 1945. 英独訳は (7) 参照。
- (10) Cf. Austad, op. cit., p. 85. また宮田, 前掲論文参照。
- (11) 宮田, 前掲論文 4頁。また Austad, op. cit., p. 85.
- (12) Cf. Armin Boyens, *Kirchenkampf und Ökumene 1939-1945*, Chr. Kaiser Verlag, Munchen, 1973, S. 61 f.
- (13) Cf. Otto Dudzus, Dem Rad in die Speichen fallen, in Wolf-Dieter Zimmerman Hrsg., *Begegnung mit Dietrich Bonhoeffer*, Chr. Kaiser, Munchen, 1964, S. 68.
- (14) WA 11. 277. 「この世の權威について」 1523. ルター著作集 第1集 第5巻 191頁
- (15) WA 38, 110. Verantwortung der aufgelegten Auffrur von Herzog Georgen. 1533.
- (16) WA 46. 736. Joh. 2: 13-16 Auslegung, (EA 46. 186).
- (17) WA 31. 1, 196. Ps. 101. 1535.
- (18) Cf. F. Lau, The Lutheran Doctrine of the Two Kingdoms, *Lutheran World*, vol. 12, 1965, p. 335.
- (19) 一致信条書, 聖文舎, 1982, 48頁。
- (20) 同上, 316頁。
- (21) WA 11. 245. 『この世の權威について, 人はどの程度までこれに服従の義務

- があるか』1523. ルター著作集 第1集, 第5巻, 131頁。
- (22) WA 39, 239 ff. ルター著作集 第1集, 第10巻, 377頁以下。
- (23) Ulrich Duchrow u. Wolfgang Huber, Hrsg., *Die Ambivalenz der Zweireichelehre in lutherischen Kirchen des 20. Jahrhunderts*. Gutersloher Verlagshaus Gerd Mohn, 1976.
- (24) Cf. Karl H. Hertz, ed., *Two Kingdoms and One World, a Source Book in Christian Ethics*, Augsburg Publishing House, Minneapolis, 1976, p. 68, 70
- (25) Cf. Austad, op. cit., p. 85 f. なお Diem と Törnvall の書は次の通りである。Harald Diem, *Luthers Lehre von den zwei Reichen*, Chr. Kaiser, München, 1938. Gustaf Törnvall, *Geistliches und weltliches Regiment bei Luther*, Chr. Kaiser, München, 1947. それらの内容の紹介は倉松功『ルター神学とその社会教説の基礎構造』創元社, 1977. 第一部第二章参照。
- (26) ベルグラフ監督はいろいろな箇所での考えを述べている。たとえば後の論文であるが, *The Task of the Church in the Field of International Affairs*, in *The Ecumenical Review*, vol. 2, No. 4, 1950, p. 336 参照。
- (27) Gustaf Aulen, tr. by E. H. Wahlstrom, *The Faith of the Christian Church*. Muhlenberg Press, Philadelphia, 1960², p. 377.
- (28) WA 50, 224. シュマルカルデン条項, 1537. ルター著作集 第1集, 10巻, 229頁。
- (29) 和協信条第5条。『一致信条書』前掲, 717頁以下参照。
- (30) D. ボンヘッファー, 森野善右衛門訳「現代キリスト教倫理」増補版, 新教出版社, 1978, 付録1を参照。
- (31) Aulen, op. cit., p. 164.
- (32) Berggrav, op. cit. *The Ecumenical Review*, p. 339.
- (33) *Ibid.*, p. 336f.
- (34) Austad, op. cit., p. 87.
- (35) Berggrav, op. cit., p. 341.
- (36) Eugen Gerstenmaier, Hrsg., *Kirche, Volk und Staat, Stimmen aus der Deutschen Evangelischen Kirche zur Oxforder Weltkirchenkonferenz*. Furche-Verlag, Berlin. 1937. アルトハウスはこの中に, 'Kirche, Volk und Staat' と 'Christentum, Krieg und Frieden' という論文を寄せている。
- (37) *Ibid.*, S. 18.
- (38) *Ibid.*, S. 219 ff. *Grundfragen des gegenwärtigen ökumenischen Gesprächs*.
- (39) Karl Barth, *Eine Schweizer Stimme, 1938-1945*. Evangelischer Verlag, Zollikon=Zurich, 1948² S. 113, 122.
- (40) 倉松功『ルターとその社会教説の基礎構造』創元社, 1977. 第一部第二章参照。

また Duchrow u. Huber, Hrsg., op. cit. 参照。

- (41) H. リチャード・ニーバー, 赤城泰訳『キリストと文化』日本基督教団出版局, 1967. 278頁。
- (42) Reidar Astås, op. cit., p. 397-400. また(8)参照。ここでは主として T. Austad と A. Hassing による英訳によった。